



2013 年度 第 1 回入試
(1 月 10 日 午前実施)

昌平中学校入学試験問題

国 語

(制限時間 50 分)

注 意

- (1) 係の先生の指示に従って、所定のらんに受験番号、氏名を書きなさい。
- (2) 答えはすべて解答用紙のきめられたところに、はっきりと書きなさい。
- (3) 問題は 1 ページから 8 ページまであります。
- (4) 印刷のはっきりしないところは、手をあげて係の先生に聞きなさい。
- (5) 途中でトイレに行きたくなったり、気分が悪くなったりした場合は手をあげて、係の先生の指示に従いなさい。

受験番号	氏 名

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(設問に字数制限のある場合は、句読点や符号も一字と数えます。)なお(※) ()は作問者の注です。

引越した翌日から、目まぐるしい日々が始まった。母は父を助けて經理の仕事をするため、夜間の經理学校に通いながら、昼間は会社でもに働いた。朝早くから夜遅くまで、ふたりは働き通しだった。弟はすでに独立して一人暮らしをし、^①わたしも深夜まで残業して帰らない。家族の姿を家で目にする機会は急速に減り、両親と話をする時間もほとんどなくなっていた。

ときおり交わす朝食の会話の中で、母の通う經理学校や父の会社が、家から自転車で行かれる距離であるということなどをなんとなく聞かされていた。^②自転車があればねえと、母は言うともなしによく呟いた。

そしてある日、ついに自転車を買ったと告げられたのである。

「ええっ、もう?」

わたしは驚いて言った。

「だって、練習を始めなくちゃ」

「ちよつと待ってよ。危ないわよ。やめたほうがいいんじゃない。バスだってあるでしょう?」

「バスは遠いもの」

乗ってしまえば、バスのほうがずっと早い。

「そりやそうだけど、パパと一緒に行きたいのよ、自転車二台、連なつて」

母は嬉しそうだった。

道端の雑草にうつすらと土埃が積もっているようなこの街の中で、家のすぐ近くにある細長い公園だけは唯一、心和む空間だった。公園といつても、グリーンベルトに近いようなものである。服を着替えると、わたしは部屋の窓を大きく開け放ち、公園の方を眺めた。葉を青々と茂らせているあの木の下あたりで、母は父に助けられながら細い道を行ったり来たりして自転車を練習しているはずだ。

「いいか、まだまだぞ、しつかり前を向いて!」

小学校三年の夏休み、家の近くの公園で自転車を練習した。父の声が背中から飛んでくる。荷台をしつかりとその両手で支えられて、自転車は辛うじて立っていた。

ギョツとハンドルを握り締め、グイと前を見つめた。よし、いまだつ。掛け声とともに強くペダルを踏み込んだ。ざざつと父の運動靴が土を蹴る音がする。よろよろとおぼつかない動きで、自転車は前に進み始めた。

^③怖がらないで、もつと漕いでスピードを出せつ。ダメダメ、手の力を抜かなけりや。そう、大丈夫、押さえているからな、転ばないからな。そうだそうだ、いいぞ、頑張れ。

必死でペダルを踏んだ。

手を放さないでつ、絶対放さないでよつ。

大声で叫びながら百メートルほど先のイチョウの木に向かって突進する。どうにかこうにか木の下まで行き着いても、今度は方向転換がまた大変だ。ペダルが足から離れそうになり、そのたびにハンドルに力が入って右へ左へぐるぐるんと曲がりそうになる。怖い。

腕の力を抜いて。緊張した背中に父の声がかかる。

ようし、思いきって力を抜くぞ。

するとペダルは一気に早く回転するような気がした。そして次の瞬間、^④ふわりと軽くなった。うわあ、どんどん行く、どんどん行く、

お父さん。

振り返ろうとして、はっと気がついた。いま一瞬、目の端に飛び込んできたあの人影はなに？ まさか……。自転車は再びイチョウに差し掛かった。木の陰に、手を腰に当てニコニコしながら立っている人がいる。お父さんだ、手を放したんだ！

そう思った瞬間、わたしは自転車ごと横倒しになって地面に滑り込んだ。

したたかに股を打って泣きじゃくりながら、乗れたんだよ、もも子ひとりで走れたんだよ、と言う父の声を聞いた。

「わたし、乗れたの……？」

涙の下から恐る恐る問うと、そうだよ、もう支えなしで乗れるんだよ、と答える笑顔が目の前にあった。

後ろで支えてもらっているときの、振り返りたくてもそうしてはいけ

ていたのだろう。

次の日、両親は朝早く会社に向かった。母は自転車用に自分で作ったコトンのパンツに、濃いピンクのペイズリー柄のオーバードライスを着て準備万端だった。父は薄茶色の作業用ジャンパーだ。勤め人だったときに銀座のテイラー（※紳士服専門の仕立業）であつらえた、艶やかな布地のスーツは、もうほとんど手を通されることがなかった。が、そのジャンパーは父に穏やかに似合っていた。

わたしは窓から首を突き出して下の道路を見つめた。やがて自転車を連ねた二人が玄関から出てきた。母が呼吸を整えてぐっとペダルを踏み込んだ。静かに臙脂色が動き出す。

(光野 桃「背中」による)

問一——線①「わたしも深夜までほとんどなくなっていた」とありますが、これと同じ意味の表現を文中から一文で探し、その初めの五字を書きぬきなさい。

問二——線②「自転車があればねえ」とありますが、この後に省略されている母の思いとして最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア もっと早く会社に行けるのに。

イ バスの最終時刻を気にしなくていいのに。

ウ 遠いバス停まで歩かなくていいのに。

エ お父さんと一緒に会社に行けるのに。

問三——線「いいか、まだだぞ、しっかり前を向いて！」について、

ないような、ちよつと心細いような気持ち、それでいて温かい安心感に包まれたような気持ち。母もいま、臙脂色の真新しい自転車にまたがって、緊張に顔を紅潮させていることだろう。明日は自転車で出勤できるだろうか。

高齢で独立した父の仕事が今までどういふ状態であつて、なにが大変なのかということに、わたしはあまり関心が向かなかつた。新しい会社にすら、行ってみようという気持ちにならない。同じ屋根の下で暮らしているも、わたしも働いている一人前の人間なのだという気があつた。いつもどこかで気になりながら、日々は自分の仕事の刺激に押し流されるようにして過ぎて行き、親という存在に思いを馳せることが面倒になつていた。わたしは、家族に背中しか見せなくなつていた。

父は自分の会社を持てたことを、ことのほか喜んでるように思えた。だが、母が夜中にふと目覚めると、布団の上に座つてひとり煙草を吸っている姿がよくあつたという。闇の中で、^⑥父はなにを思っていたのだろうか。暗い塊のように、じつと動かぬその背中を見つめながら、母はどんな気持ちだったのか。背中を見せながら、私たちは互いにただ見守ることで精一杯だった。

しかしそうであつたとしても、背中を支えてくれる手の感触を、わたしはどこかで感じていた。^⑦倒れぬように、後ろからしっかり支えられ、グイと力強く自転車が押し出される。自分一人で意気揚々とペダルを漕いだつもりでも、実は見えない家族の手で、外の世界に押し出され

次の各問いに答えなさい。

(1) 場面はこのセリフから大きく変化しますが、母とわたしに共通するある出来事が、前後の場面をつなぐ役割を果たしています。その出来事を説明した次の文の A・B にあてはまることばを、文中から指定の字数で探し、それぞれ書きぬきなさい。

A(九字)

B(六字) すること。

(2) また、そのときの、母とわたしに共通する(とわたしが思っている)気持ちを書かれている一文を文中から探し、その初めの五字を書きぬきなさい。

問四——線③「怖がらないで、いいぞ、頑張れ」とありますが、このカギかっこのない父親のセリフだけの三行から読み取れることとしてあてはまらないものを、次のア～エの中から一つを選び、記号で答えなさい。

ア 娘が転ばないために、懸命に教えようとする父の熱い思い。

イ 一つ手を放そうかと、タイミングをはかっている父の緊張感。

ウ 後ろから聞こえる父の声を唯一の頼りに、自転車を漕ぐわたしの必死さ。

エ 声を掛け続けることで、少しでも娘の不安を和らげようとする父のやさしさ。

問五——線④「ふわりと軽くなった」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自転車を支えていたお父さんが、力を抜いたから。

イ 後ろで持っていたお父さんが、手を放したから。

ウ 道が、いつの間にか下り坂に差し掛かったから。

エ お父さんに言われて、やっとなりの力が抜けたから。

問六——線⑤「お父さん」とありますが、わたしがこのように叫ん

だのはなぜですか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 自転車を漕げるようになってきているのを、お父さんにすっかり見ていてほしかったから。

イ 一つの間にか後ろのお父さんの気配がなくなった気がして、とても心細かったから。

ウ 自転車のスピードがどんどん上がるのが怖くて、お父さんにしっかり持ってほしかったから。

エ 自転車のスピードがどんどん上がるので、あんまり強く押さないでほしいと思ったから。

問七 線⑥「父はなにを思っていたのだろうか」とありますが、わたしは、父の心の中にあつたのはどのような気持ちであつたろうと思つてみますか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 会社がうまくいくだろうかという不安。

イ ようやく自分の会社が持てたという充実感。

ウ あと何年生きられるのだろうかという死への恐怖。

エ 会社なんか起こさなければ良かったという後悔。

問八 線⑦「倒れぬように、後ろからしっかり支えられ」とありますが、小さいころは父がわたしの背中を支えました。そして今日、公園で父が母の背中を支えています。では、明日からはだれがだれの背中を支えようとしていると考えられますか。最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア わたしが、母の背中を支える。

イ 母とわたしが、父の背中を支える。

ウ わたしが、父の背中を支える。

エ 父とわたしが、母の背中を支える。

身体はなんとなく意識の思うようになると考えるからであろう。もつと徹底して、^②美容整形でもすれば、身体は人工だという印象はさらに強くなる。^①これは環境問題であろう。身体という自然を、意識が思うようにできると思っているからである。

それなら ^③A とはなにか。ヒトの脳でとくに発達した働きである。その働きが言葉を操り、都市をつくり出し、いわゆる近代社会をつくる。遺伝子からすれば、ヒトとほとんど違わないチンパンジーは、そのどれもやらない。脳が小さいからである。つまり環境問題を個人に戻せば、それは心と身体の対立という、たいへん古典的な問題に戻る。意識とはつまり心だからである。環境問題を追求していくと、原理的には自分の心身の問題に戻る。

身体が自然だという説明をしよう。われわれの身体は、じつは生態系(※川、海、草原、森林など、あるまとまりを持った自然環境と、そこに生息するすべての生物で作られている空間)である。なにしろ一億以上の生物がすみついているといわれるからである。消化管のなかには、大腸菌をはじめとして、じつに多くの細菌がすんでいる。食物といっしょに外から入ってくるから、そんなものは嫌いだといっても、どうにもならない。腸内細菌(※腸の中に常在する細菌。ふつう無害で、栄養摂取や外来菌の防御に役立ち、また発癌や感染症をもたらしこともある)叢(※この場合は、集まり)、^④腸内の生態系のバランスが崩れると、たいていの人は腹の具合が悪いという。腹の具合が悪いのは、その意味

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(設問に字数制限のある場合は、句読点や符号も一字と数えます。)なお(※)は作問者の注です。

環境問題への対応は「自然環境」対「人間社会」という図式でとらえられがちである。しかし、この図式が環境問題の見方を歪め、方向を見えにくくしてきたと思う。

こういう図式があるから、「人間だって自然でしよう」という人があつた。そのとおりだが、その先を考える必要がある。それなら人工とはなにか。すべての人工物は、自然である人がつくつたんだから、それも自然だ。ここまでいけば、^①屁理屈であろう。

人工とは、人間の意識がつくり出したものをいう。都市はその典型である。都会には、人間のつくらなかつたものは置かれていない。樹木ですら都会では人間が「考えて」植える。草が「勝手に」生えると、それを「雑草」というのである。

他方、人間の体は自然に属している。身体は意識的につくつたものではないからである。自分の身体がどんな形になつていようと、それは自分のせいではない。まさに自然のなせるわざなのである。

自分の身体が人工ではないということを、都市社会ではできるだけ「意識させない」。^②黒い髪は染め、唇は赤くし、爪は切り、ひげは剃り、裸では暮らさず、服は始終取り替える。そうしていれば、

では、かならずしも「自分のこと」ではない。腸内にすむ生物仲間のこと、^③え 環境問題なのである。人間は一人で生まれて、一人で死ぬ。ときどきそう威張る人があつたが、生物学的には^④それは間違いである。意識がそういつているだけである。死んだ人を火葬すれば、じつは一億玉砕(※全滅)である。消化管に限らない。気道(※肺に通じる空気の流れ)。鼻腔・口腔・喉頭・気管・気管支などからなる)にもさまざまな生きものがすんでいる。エイズになると、それが原因となつて肺炎を起こしたりする。しかし都会の人は日常それを「実感」してはいないはずである。身体はその意味では意識されないからである。

そればかりではない。去年の今日という日を考えてみよう。その日、私たちの身体は、今年の今日と同じように、七割近く水でできていたはずである。それじゃあ、去年身体に入っていた水で、今年の今日まで残っているのは、何割あるか。ほとんど残っていない。この一年で、自分が何トンの水を飲んだか、よく考えてみればいいのである。身体は川と同じである。川はいつでもそこにあるが、水はたえず入れ替わっている。

水は入れ替わるにしても、堅い部分は違うでしょうが。^⑤残念でした。それもほとんど入れ替わっている。小腸の表面を覆う上皮は、人体でいちばん入れ替わりが早い。三日で入れ替わってしまうのである。物質的にいうなら、去年の私と今年の私は、ほとんど別物である。意識はそんなことはいっさいいわない。去年の私も、今年の私も、「同じ私」だといふ。身体については、意識はほとんど^⑥デタラメの嘘をいうのである。

5 次の①～⑤の漢字は熟字訓じゆくじくんと言って、特殊な読み方をします。その読みがなを、それぞれひらがなで書きなさい。

- ① 景色
- ② 果物
- ③ 七夕
- ④ 八百屋
- ⑤ 眼鏡

6 次の①～⑤の文の——線をつけたカタカナを、それぞれ漢字になおしなさい。

- ① 消化キカンをわずらう。
- ② 海岸にノって道路が走る。
- ③ 空港からリヨカクキが飛び立った。
- ④ 彼の態度はまことにイサギヨい。
- ⑤ 一人暮らしをして、立派にセイケイをたてる。

【問題は、ここで終わりです】

